

ラヴィルマルケとリューゼル（八）

——いわゆる「バルザズ・ブレイス論争」について——

梁 川 英 俊

『オセアン』と『エクレクトウール』

一八七二年十一月十二日、リューゼルはルナンにこう書いた。

たぶん、私の研究報告『「バルザズ・ブレイス」の真正性について』はもう受け取られていることと思います。形式においても内容においても、少し激しすぎたのではないかと気にしていますが、これにはたぶんあなたも同意されると思います。私はイギリスやフランスからード・ラヴィルマルケ氏の陣営の人、つまりは貴族で政党王朝派も何人かいましたが——賛辞や証言をもらって、少し安心していきます。サン・ブリュー司教はわざわざ私に声を掛けて賞賛してくれて、この小冊子を十五部買ってくれました。しかしながら、彼はまだ——あなたもそうだと思うのですが——ード・ラヴィルマルケ氏が私が指摘した見事な歌の作者であって改作者ではないというのが信じられないようです。しかし、これは事実なのです。なぜド・ラヴィルマルケ氏は沈黙を守り続けるのでしょうか。そんなことをしていると、普通は逆のことを証明できない証拠と見なされるものですが¹。

リューゼルが語っているように、この小冊子の出版後もラヴィルマルケはなお沈黙を守ったままであった。そして結論から先に言えば、俗に「バルザズ・ブレイス論争」と呼ばれるこの論争で、『バルザズ・ブレイス』自体に関する当事者同士の学問的な論争は一度も起きなかつたのである。そもそも当のラヴィルマルケは一度も論争に参加せず、参加したのほもつぱら彼の取り巻きだけであつて、その実態はカトリックと共和派の政治的な争いにすぎなかつた。

それを象徴するのが、すでにその一端を紹介した『オセアン』と『エレクトウール』の両紙の間で繰り広げられた論戦だつた。一八七二年末からしばらく休止していたこの論戦が再燃したのは一八七三年三月。きっかけはリューゼルが『エレクトウール』に発表した一篇の民話であつた。サラウンは『オセアン』紙上で好色な修道士が登場するこの滑稽譚を嘲笑し、「リューゼル氏のあけすけな性格」といタイトルの記事で、まるでこの話が彼の創作であるかのように扱つた。リューゼルが民話は採取したものをそのまま掲載しただけで、聖職者批判はブルターニュの伝統だといくら反論したところで無駄だつた。サラウンはこう書いていた。

議論に入る前に次のことを確認しておこう。第一に、ド・ラヴィルマルケ氏の作品はつねに大革命や自由思想の機関紙に攻撃されてきたことを。第二に、『バルザズ・ブレイス』に向けられた集中砲火は、実のところケランボルニュのバルドという砲兵によって供されたただひとつの大砲から出ているということ。第三に、このいまわしい策略の糸を引いているのは、ルナン氏にほかならぬということ。

サラウンの批判を支えていたのはこの種の憶断であつた。王党派の彼にとつて『バルザズ・ブレイス』は学問的な議論の対象ではなく、いかなる犠牲を払つても死守すべき神聖不可侵の牙城だつたのである。論戦にはリューゼル以外に何人

かの人に加わって、ことを政治の次元に閉じ込めないように尽力した。なかでもダルボワ・ド・ジュバンヴィルは、「ジャン・サラウン氏への手紙」なる副題をもつ小冊子『バルザズ・ブレイス』にもう一言『*Encore un mot sur le Barzuz Breiz*』を出版してこう書いた。「もしあなたが人物批判ばかりをしたり、政治的な文脈に話をもつていこうとしたりするならば、私はこう結論する権利がある。あなたが擁護する大義はなんら適切な理由も与えないので、あなたは沈黙を守るか、議論を論争と関係のないテーマに導くかのどちらかになってしまおう、と^③」。さらにアンリ・ゲドスも自身が主宰する雑誌『ルヴュ・セルティック』でサラウンの文章を引きつつ、「ブルターニュには、ブルターニュに無関係な人には『バルザズ・ブレイス』の真正性を論じる資格がないとするばかりか、神や社会の敵とする人がいる^④」と批判した。これに対してサラウンは、七三年十月、次のような捨て台詞を残して一方的に論争に終止符を打つ。「いったい誰に私たちの言語や伝統に関するあなたたちの無知を隠すことがあろうか。あなた方の書いたものはそこにあり、あなた方が断罪されるために今後に残ることだろう。いつの日か（そう遠くない日であることを願うが）、彼らが学問的な視点から判断される日が来ることを。その日には、パリの自由思想の教授（ゲドス）やトロワの古文書管理人（ダルボア）が真面目に受け取られることははやないであろう^⑤」。

翌七四年、『バス・ブルターニュの民謡集』第二巻を上梓したリューゼルは、その「序文」で次のように書いた。

この歌集の第一巻は、ド・ラヴィルマルケ氏とその『バルザズ・ブレイス』の真正性を擁護すると主張するある種の新聞や幾人かの人々によって激しく攻撃された。その間、ド・ラヴィルマルケ氏自身は頑なに沈黙を守った。残念ながら、こうした人々がこれまでに生みだしてきたのは、漠然とした一般論、感情的な理屈、論点先取りの虚偽、そして何よりも不愉快といわずとも少なくとも不愉快であることを厭わない個人攻撃だけだったのである。彼らがこの問題をこ

んな風に扱うかぎり、彼らに言うべきことは何もない。しかしながら、彼らがそれを歴史的・批判的に扱い、幾つかの証拠を並べ（もしあればの話だが）、真剣かつ冷静に、学問的なやり方で議論する気になれば、いつでも私は助力を惜しまないだろう。

しかしながら、こうしたリューゼルの期待が果たされることはなかった。以後、彼は『バルザズ・ブレイス』に関して公に発言することはほとんどない。今日なお反ラヴィルマルケ派の頭目と見なされることの多いリューゼルにとって、「バルザズ・ブレイス論争」とはこのようなものだったのである。

XII 「論争」から「和解」へ

ジャーナリスト・リューゼル

一八六八年に教職を離れてから、リューゼルの生活の中心はブルターニュの口頭伝承の収集であった。一八七一年三月、彼はルナンに宛ててこう書いている。「思うに、学者たちが後で分類したり解説したりできるように、素材を粘り強く丹念に探し収集するのが私の天職なのです。他の人がこの仕事を私より上手くできるとは思いませんし、たとえ同じようでしたとしても、同等の知識をもつてというわけにはいかないでしょう」。彼は一八六八年から毎年、この「天職」のために公教育省から助成金を受け取っていた。『バルザズ・ブレイス』批判のパンフレットを出版した後も、一八七二年九月に五回目となる報告書を公教育省に提出し、翌七三年一月には、ブルターニュ近海の島嶼部の口頭伝承の採集のために、新たに六〇〇フランの助成金を獲得していた。とはいえ、相変わらず故郷トレゴール地方以外の土地での収集の成果はは

かばかしいものではなく、その年に赴いたウエツサン島、モレーヌ島、サン島、グロワ島、ブレア島などで得られた収穫もわずかであった。

翌七四年、教職を離れてから定職をもたなかったリューゼルに転機が訪れる。この年、モルレーで創刊された新聞『エコー・ド・モルレー』*L'Écho de Morlaix* に主筆として参加し、ジャーナリズムの世界に身を投じることになったのである。しかし、これは彼にとつて必ずしも積極的な選択ではなかった。すでに述べたように、教職の後にリューゼルがまず望んでいたのは図書館員のポストであった。採集のための時間を確保するのに有利だと判断してのことであったが、七二年には同じ理由から真剣に治安判事になろうと考えたこともあった。しかし図書館員のポストには空きがなく、また治安判事になるためには有力な代議士の後ろ盾が不可欠であった。そんなとき、第三の選択肢として浮上してきたのがジャーナリズムだったのである。もちろん、それは唐突に現れたわけではない。リューゼルはかねてからカトリックの『フェイス・ア・ブレイス』に対抗し得るブルトン語の新聞をつくりたいと考えており、七二年にはそのために『アルマナク・ブレイス・イーゼル（バス・ブルターニユの暦）』*Almanach Breiz Izel* という小冊子を試作していたほどであった。ジャーナリズムは彼にとつて、農民に共和主義思想を広めるための手段のひとつだったのである。

『エコー・ド・モルレー』は共和派の新聞ではあったが、内容は穏健で、ブルジョワ的価値観を否定するものではなかった。しかし、それでも保守的なこの地方では、風当たりは予想以上に強かった。実際、同紙は創刊されたその年に早くも訴訟の対象となる。しかも、リューゼルには「つまらない理由、単なる冗談^⑦」としか思えなかつたその訴訟に対して裁判所が下した判決は、支配人に罰金一〇〇フランと禁固六日間という厳しいものだった。それだけではない。翌七五年に起こされた新たな訴訟では、七〇〇フランを超える法外な罰金が請求され、さらに七七年には「大臣たちを侮辱した咎^⑧」で支配人とリューゼルの双方にそれぞれ五〇〇フランの罰金が科されさせたのである。当時のリューゼルの主筆と

しての年収が二〇〇〇フランであつたことを思えば、この罰金がいかに高額であつたかが知れよう。

しかも、当初は「農民向けに、毎週ブルトン語で、少なくともひとつ、政治、農業、衛生、道徳などに関する記事を書く」⁹⁾だけのはずであつたその仕事は、蓋を開けてみると多忙をきわめ、バカンスはおろか数日の休暇を取ることさえままならなかつた。もちろん、こんな状態では満足な収集活動ができるはずはない。結局、七四年から八〇年まで、リュールがモルレーで過ごした六年間に採取された民話はわずかに十二篇、歌は十五篇にすぎなかつたのである。¹⁰⁾

ラヴィルマルケの告白

では、その間ラヴィルマルケはどうしていたか。すでに述べたように、彼は論争が始まつて以来、自分に向けられた批判に対しては一切答えを返さなかつた。それどころか、表向きはそんな批判など存在しないかのように振舞つてさえた。たとえば、一八七六年九月に開催されたアンシアシオン・ブルトヌヌの大会において、彼は「ブルターニュの詩歌における女性の役割」と題して報告したが、ここでは「ジョイオス公」や「レズ・ブレイス」をはじめ、リュールたちによつて贗作の嫌疑をかけられた『バルザズ・ブレイス』の多くの歌を引用していた。その社会的信用が衰えた形跡もなかつた。同大会では、歴史家のラポルドリーが「ブルターニュ民謡を見出し、ブルターニュにその最も貴重な歴史的称号のひとつと、おそらくはその最も純粹な文学的榮譽を与えた」と万座の聴衆を前に彼を賞賛していたし、同じ年にはルイ・ド・カルネの死去に伴つて空席となつたフィニステール考古学協会の会長にも選ばれていた¹¹⁾。精力的な仕事ぶりにも変化はななく、パリとカンペルレに交互に住みながら、さまざまな學術団体で論文の発表や報告を行つていた。とはいへ、彼の耳に批判が届いていないわけではなかつた。その証拠に、ラヴィルマルケはしばしば私的な席で『バルザズ・ブレイス』に向けられた批判について話題にしていた。以下、幾つか証言を引こう。

まずはエミール・エルノー *Emile Ernauld* が伝える話である。のちにポワティエ大学で教鞭をとり、『ヴァンヌ・ブルトン語辞典』をはじめとする業績でフランスのケルト学に大きな功績を残すことになるこの人は、故郷サン・ブリューのエコール・サン・シヤルルで教師をしていた一八七九年、復活祭の休暇を利用して、精神的な師と崇めていたラヴィルマルケをケランスケールに訪ねる。高等実業学校でアンリ・ゲドスの薫陶を受けた彼は、まだ二七歳ながらすでにコート・デュ・ノール地方で諺やなぞや歌を採集して『メリュジーヌ』に発表していた。カンペルレを訪れる前に、プレストでトルー・ド大佐に会っていた彼は、ラヴィルマルケとの会見後オディエルヌにソヴェを訪ね、そのときの様子を語った。エルノーの話に驚いたソヴェは、その内容をゲドスに伝え、ゲドスは自らエルノーに手紙を書いてことの真偽を確認した。以下は、そのゲドスに対するエルノーの返答の一部である。

私が二度目にド・ラヴィルマルケ氏の家を訪れたとき、彼は私に『バルザス・ブレイス』の歌の要素が幾つか含まれた数冊のノートを見せてくれました。(ノートは他にもまだあったそうですが、残念ながら不要だと思って燃やしてしまったとのことでした)。これらのノートには出版されなかった歌も幾つか含まれていました。彼はそのひとつを読んでくれたのですが、十字軍への参加の呼びかけのような内容でした。加えて、彼は私にメルランの冒頭を歌ってくれ、いまだにこの歌を唄ってくれた乳母の姿が目に浮かび、声が聞こえるようだと言っていました。彼はまた、疑問があったときにはアンリ神父に相談すると、だいたい満足のいく答えを教えてくださいました。(……)最後に彼は、最初の頃に彼の本に関心をもってくれた人たちにはこうした証拠を示してきたと言った上で、疑っている人を説得するための証拠はまだ他にも十分にあり、最近も彼の家に立ち寄ったダルボア・ド・ジュバンヴィルにそれを見せたところ、納得した様子だったと付け加えました¹²。

最後のジバンヴィルの件は確認されている事実ではなく、何らかの間違いである可能性が高い¹⁰⁰。が、いずれにせよ、ここでエルノーが伝えるラヴィルマルケの姿からは、リユーゼルたちの批判に簡単に屈する気配は少しも窺えない。逆にここに見えるのは、必要があればいつでも歌集の真正性を保証する証拠を提示することができるというかなり強気な姿勢である。つまりこの証言から推察する限り、リユーゼルたちの批判は彼らの期待とは裏腹に、ラヴィルマルケにとって『バルザズ・ブレイス』の評価を根本から揺るがすほど深刻なものとしては受け取られてはいなかった。それどころか、それははっきりと反駁可能なものとして認識されていたのである。ラヴィルマルケは最晩年の論考においてもなお、ブルトン語の代表的な詩として『バルザズ・ブレイス』の「ノメノエの租税」を挙げていたが、それもただの強弁ではなかったと言わねばなるまい。

続けてポール・セビロ Paul Sébillot の証言を取り上げよう。このオート・ブルターニュの民俗学者は一八八〇年頃にラヴィルマルケと会話を交わし、その様子を「ラヴィルマルケが私に語ったこと」というタイトルで『フルトゥール・ブルトン』 *Furteur breton* 誌上に発表した。彼はこう書いている。

「あなたたち若い人は、学問的な方法のおかげで、民話をそのまままるごと出版できるんですから幸運ですよ。私の時代にはそんなことはまずできませんでしたから」。「道を拓いたのはあなたですよ。私は何度かこう書いてきました。もし『バルザズ・ブレイス』がなかったら、民話や民謡を読む人などおそらくいなかったらう、と。あなたが最初の書物を書いたときの時代状況を教えていただけると助かるのですが。もしあなたがあの名著の成立過程をできる限り正確に語ったとしても、あなたの栄光に傷がつくことはないはずですよ。文学史的にも大変興味深い話になるでしょうから」。「ええ。(……)でもずいぶんと前のことです。もう覚えていませんよ。騙されることもありましたしね」¹⁰¹。

この会話から読み取れるのは、ラヴィルマルケが『バルザズ・ブレイス』の方法論的限界をはっきりと自覚し、またその内容に瑕疵がないわけではないことを十分に認識していたということである。つまり彼はリュージェルたちの批判に屈しはしなかったものの、『バルザズ・ブレイス』の内容に問題がないとは考えていなかった。ただ彼にとって、それはあくまでも「時代」のせいであり、また「騙され」たためであって、自らの意図とは無関係だったのである。実際、ラヴィルマルケは新しい文献学的方法を習得しようという努力をしており、とくに一八七九年にその成果として出版された『中世のブルターニュの詩』*Poèmes bretons du Moyen âge* は、論敵であるジュバンヴィルやゲドスにも『ルヴュ・セルティック』誌上で好意的に迎えられていた。新たな方法を学ぼうとするこのラヴィルマルケの姿勢には、賞賛すべき点こそあれ、非難されるべき点はない。もちろん、彼がその方法を『バルザズ・ブレイス』にも改めて適用しなかったという批判は当然あり得るだろう。しかし実はラヴィルマルケとてそのことを考えなかったわけではなかった。エミール・エルノーはこう証言している。「私はまた『バルザズ・ブレイス』の批評版がいかに望まれているかを知っているし、ド・ラヴィルマルケ氏にもそのことを語ったことがある。が、彼がいまそのつもりでいるように批評版を出版することがあるとしても、その役目は私に負わせるだろう。それが進歩の法則というものだ¹⁵」。

ラヴィルマルケの『バルザズ・ブレイス』に対する認識は、リュージェルたちの贋造や欺瞞といった批判とは明らかに齟齬があるものであった。少なくとも、「沈黙するのは相手の主張を認めているからだ」という彼らの主張は、ラヴィルマルケの側の実情を正確に把握したものとはとても言えなかった。おそらく、「沈黙」の理由はひとつではなかったろう。もちろん、時の経過もそのひとつであったに違いない。なにしろこのセビヨとの会話の時点で、『バルザズ・ブレイス』の出版からはすでに四〇年以上の歳月が経過していたのである。ラヴィルマルケが「よく覚えていない」と語ったとして

も、そこに必ずしも嘘偽りがあつたわけではなかつたろう。ちなみに、このセビヨとの会話が交わされたのとはほぼ同時期の一八八〇年二月初めには、カンベルレでアンリ神父が死去している。『バルザズ・ブレイス』の成立に重要な役割を果たしたこの人物の死は、歌集とともに流れた歳月の長さをもによりも雄弁に物語っていた。

ラヴィルマルケとリュージェルの「和解」

さて、新聞の仕事はリュージェルから彼にとって最も重要であつた収集活動のための時間を容赦なく奪い去っていった。こうしたなかで、リュージェルはブルターニュ文学の研究のための時間を確保するために本気で転職を考えるようになる。一八七九年五月、ルナンに宛てて再び治安判事のポストを狙うつもりだと書いた彼は、翌一八八〇年九月、早くもダウラスの治安判事に任命される。しかしながらその折も折り、カンパールの古文書保管人であつたルネ・フランソワ・ルメンが死去し、リュージェルはその後継を打診される。もちろん、治安判事になつたばかりの彼は、いったんはその申し出を断る。しかし、ほどなく治安判事の仕事が予想以上に厳しいものであることが明らかになると、今度は一転してその申し出を引き受け、翌八一年二月、カンパールでフィニステール県の古文書保管人に任命される。

すでに述べたように、前任者のルメンは癖の多い性格で、リュージェルとの関係も一八七一年以来断絶したままであつた。一方、そのルメンから激しい中傷を受けたラヴィルマルケは、七二年のサン・ブリューの大会のちこの中傷者と和解していた¹⁶。その社交的なラヴィルマルケが、同じ地域で働くことになつたリュージェルと「和解」するのは、もはや時間の問題と言つてよかつた。一八八一年二月九日、二人は早くもカンパールの県庁における会合で、それぞれ考古学会会長と県の古文書保管人という立場で顔を合わせる。リュージェルはアンリ・ゲドスにそのときの様子をこう伝えている。

昨日、私はカンペール考古博物館の件に関して県庁で行われた集会で、ド・ラヴィルマルケ氏に会いました。私はまっすぐに彼のところに行き、近況を尋ねました。彼は力強い友愛の身振りで私を歓待し、委員たち皆がいる前で私を抱擁し（相変わらず役者です）、こう言いました。「あなたのおかげで、私も真面目に仕事をするようになりましたよ」¹⁷。

その後、リューゼルはラヴィルマルケが会長を務めるフィニステール考古学協会への入会を希望し、一八八一年六月の会合で出席者の賛同を得て承認される。ラヴィルマルケはその際、進んで会則で定められた二人の保証人の一人となる一方、リューゼルがカンペール考古博物館の学芸員に任命されるよう県に働きかけました。こうして同じ協会のメンバーとなった二人は、以後ほぼ毎月のような顔を合わせることになる。両者の関係は少なくとも表面上は完全に修復されたように見えた。しかし内情は複雑だった。同年十一月、『バス・ブルターニュのキリスト教伝説』*Legendes chrétiennes de la Basse-Bretagne*を上梓したリューゼルは、ラヴィルマルケの反応についてゲドスにこう報告する。

ド・ラヴィルマルケ氏は（彼には正真正銘の和解の印として二冊献本しなければならないと思っただのですが）、丁寧な、しかし幾分儀礼的な謝辞とともに、こんなふうには書き送ってきました。「残念ながら、こう申し上げなければなりません。ここでのあなたは、以前の『つねにブルトン人』のときのように、「私は若き乙女と子供たちのために歌う」とは言うことができないのです、と」¹⁸。

さて、古文書管理人になったリューゼルであったが、その仕事が想像以上に多忙であると気づくのに時間はかからなかった。前任者のルメンは所蔵本の目録の作成はおろか、スタンプすら押しておらず、リューゼルはこうした怠慢の埋め

合わせをする一方で、古文書学の専門家になるための資格試験の準備もしなければならなかったのである。さらにこの職務は、出張やレポートの作成、小中学校での賞の授与式への出席、義務的な仕事部屋への在室など、公務員につきものの形式的な仕事にも事欠かなかった。休暇も年に一ヶ月しかなく、採集の時間を得るために選んだ職業ではあったが、実際にはフィールドに出る余裕などほとんどないに等しかった。結局、彼がカンペールに住んだ八〇年から九五年の間に採集された民謡は、わずかに五篇にすぎなかったのである¹⁹⁾。

もっとも、その理由はたんに多忙のためばかりではなかったろう。すでに述べたように、リューゼルにとって故郷トレゴール地方以外での収集活動はやはり容易ではなかったのである。さらに健康上の理由も考慮されなければならぬ。八〇年代半ばからリューゼルの書簡には、頭痛や目の疲れなど健康に関する愚痴が散見されるようになる。八五年六月、六四歳の誕生日を目前にしたリューゼルはゲドスに宛ててこう書き送っている。「すべてが私の気を重くさせ、働くことを妨げるのです。私はかつて面白く思われた研究や調査への関心を失っておりまし、いまや何をするのも嫌だと思わずにはできませんが、その一方で他人が書いていることはほぼすべてが優れているように思われるのです²⁰⁾」。

「バルザズ・ブレイス論争」の再燃

ところで、ラヴィルマルケとリューゼルの和解が進んでいたこの時期、「バルザズ・ブレイス論争」の方は新たな参加者を得て活発化しようとしていた。中心になったのは、若きジョゼフ・ロート Joseph Lott。一八四七年生まれの彼は、のちにレンヌ大学のケルト講座の教授に、また一九一〇年にはジュバンヴィルの後任としてコレージュ・ド・フランスの教授になり、さらにゲドスの後継者として『ルヴュ・セルティック』を主宰して、フランスのケルト学を牽引していくことになる人物であった。彼はすでに一八七七年に、『バルザズ・ブレイス』についてこう書いていた。「ブルターニュにおい

て、歴史的な観点からも文献学的な探索が必要だと示すために『バルザズ・ブレイス』について語ったところで何になろう。問題はすでにブルトン人自身の手によって決着がつけられている。冷静なブルトン人ならば一人としてこう言うのをためらわないだろう。古い歌はまったくの作り物で、その言葉もまがい物であり、最も新しい歌でも、採集されたときのままのものはきわめて少ないか、おそらくまったくなく、と²¹。

八〇年代の半ばから始まる新たな『バルザズ・ブレイス』批判の機運のなかで、リュウゼルに積極的な役割を期待する人は、このロートをはじめとして少なくなかった。しかし当のリュウゼルにはその気はまったくなかった。一八八六年、ゲドスに宛てて「今度は私も観客でいるつもりです²²」と書いた彼は、翌八七年四月のルナン宛の手紙でこう書く。

しばらく前から、ロート氏などの教養がある優秀な若いケルト学者の間で、批判的かつ歴史的な観点から、ド・ラヴィルマルケ氏に対する新しい反対運動を企てようとする動きがあることは、私も気づいております。私のところにもいろいろ言ってくる者がありました。私は断りました。このことについて私は言うべきことはすべて、あるいはほぼ語り尽くしてしまいましたし、いまはド・ラヴィルマルケ氏とともに良好な関係にありますから。彼は私のことを何かと気遣ってくれますし、それも幾分かは私がまた新たに戦いを挑むのを恐れているからではないかと思えます²³。

リュウゼルは一八八三年来、ラヴィルマルケが会長であったフィニステール県考古学協会の副会長を務めていた。こうした関係にわざわざ波風を立てるようなまねをするのは、彼とて望んではいなかったろう。実際、その後リュウゼルが公の場で『バルザズ・ブレイス』やその著者を批判することは一度もなかったのである。一八九〇年一月一日、レジオンドヌール勲章シユヴァリエを授与されたリュウゼルは、一月三〇日に行われた考古学会の記念式で、ラヴィルマルケの手か

ら勲章を渡される。ラヴィルマルケは慣例に従って短いスピーチをし、そこで受勲者を「親切な副会長」と呼ぶとともに、その「輝かしい一連のブルターニュ文学研究」が報われたとリューゼルを称賛した²⁴。

一方、この年の十月、リューゼルは『バス・ブルターニュ地方の民謡 ソーン篇』*Sonjour-Breiz Izal*の第一巻を出版する。前二巻が「歴史」や「物語」を歌うグウェルスを中心に編まれたものであったのに対し、この巻に集められたのは子守唄や恋歌などのソーン、すなわち「生活歌」であった。その出版に大きく貢献し、「序文」まで執筆したのは、アナートル・ルブラス *Anatole Le Braz* だった。のちに『死の伝説』*La Légende de la mort*でブルターニュの代表的な民俗学者として広く知られることになるルブラスは、民謡の収集家として知られたニコラ・ルブラスの息子で、晩年のリューゼルの片腕としてその仕事を助けていたのである。三九ページに及ぶその「序文」のなかで、ルブラスはブルターニュの民謡採集の歴史に触れて『バルザス・ブレイス』に言及し、おそらくは師の意向を受けて、まずこう述べる。「私は今日ほとんど消えかかっている古い論争を再燃させるつもりはないし、また現代の選り抜きのケルト学者たちによって結審したと見なされている訴訟書類を、いまだらひとつひとつ取り上げて議論する気もない。結論は読者に任せよう。捨てるも認めるも読者次第である²⁵」。しかし、著者はすぐにその中立的な態度を捨てて、こう続ける。

私はいえ、ド・ラヴィルマルケ氏の才能と彼がブルターニュ文学に過去現在にわたって与え続けている目覚ましい功績に対して、心からの深甚なる敬意を抱いている。とはいえ、私は『バルザス・ブレイス』の歌が完全に本物であることに異議を唱える人たちに同意することしかできない。私はド・ラヴィルマルケ氏のように歌を集めたのかは知らない。ただ言えるのは、少なくとも私が調査した地域では、民衆はド・ラヴィルマルケ氏が紹介したようには歌わないばかりか、その最も見事な歌ですら忘れており、これまで聞いたこともないと考えていることだ。(……)私はレパー

トリーの広さと記憶の確かさで有名な歌手を集めて、『バルザズ・ブレイス』の一部を読んで聞かせた。私はトレゴール地方でそれをしたので、好んでトレゴール方言という指示がある歌を選び、たぶんこの地方で採取されたのだから、聴く人の心にも多くの思い出を呼び起こすだろうと期待していた。彼らはとどころに馴染みの歌詞を認めたが、一節九ごとということはめつたになく、歌全体となるとただの一度もなかった。私の朗読のなかに、彼らにとつて理解不可能で、実際、ブルトン語というよりもウェールズ語やゲール語に近い熟語や言い回しや文の要素が現れると、彼らは失望のあまり押し黙ってしまうこともあった。また別のときには、彼らは激しく抗議し、互いにああだこうだと言いながら、「いやいや、違いますよ、そんな風じゃありません」と叫んだりもした。私が彼らに歌詞を作り直してくれと頼むと、彼らは無情にも『バルザズ・ブレイス』の最も優美な花を刈り取ってしまうのだった。誰一人聴いたことがないという、この書物の最も見事な多くの歌については言うべき言葉もない²⁶⁰。

一八九〇年十月三〇年、アナトール・ブルブラスは出版されたばかりの『バス・ブルターニュ地方の民謡 ソーン篇』第一巻を、フィニステール県考古学協会の例会で紹介した。彼は「序文」に書かれた自らの『バルザズ・ブレイス』親にも触れたのだろうか。いずれにせよ、ラヴィルマルケは例会の後、発表者に賛辞を呈し、「学問的方法が確立された時代に生まれた」ことを羨んだという。議事録によると、この日の例会は四時過ぎに終わったが、その後リュージェルはしばしばそうしていたように、ラヴィルマルケとカンペルレへの帰路を共にしたらしい。話は自然と彼の青年時代の歌集にも及んだだろう。リュージェルが、おそらくは帰宅後にその裏に走り書きしたと思われる封筒が残っている。そこにはこう書かれていた²⁶¹。

ド・ラヴィルマルケ氏自身の言うところによれば、アンリ神父とニゾンの主任司祭のゲガン神父が、『バルザズ・ブレイス』のブルトン語のテキストを作ったということらしい。私はそれをド・ラヴィルマルケ氏の口から、一八九〇年十月三〇日に聞いたのだ²⁸。

知られる限り、これはリューゼルが『バルザズ・ブレイス』に関してラヴィルマルケから得た唯一の直接的な証言であった。そして、彼はたぶんこれを贋作の証拠として聞いた。実際、それから二年以上を経た一八九二年八月三〇日付のゲドス宛の手紙で、リューゼルは再びこのときの会話に触れ、こう書いている。

ド・ラヴィルマルケ氏が『バルザズ・ブレイス』の出版を準備していた当時、彼と話をしたブルトン語圏のブルトン人たちは、口を揃えて、あの人は当時ブルトン語を知らず、フランス語でしかコミュニケーションできなかったと断言しました。しかも、ド・ラヴィルマルケ氏は、あるとき自ら胸にため込んだものを吐き出すように率直に（これは彼にとっては稀なことですが）、『バルザズ・ブレイス』のブルトン語のテキストは、アンリ神父と、ラヴィルマルケが住んでいたニゾンの主任司祭であったゲガン神父が作ったと私に語ったことがあります。

なんと騙されやすい男なのでしょう。（……）この人のうちではすべてが偽物なのです。この前の木曜日、われわれ考古学協会の会合の前に、彼はアルナ・デュ・フレトリー氏に（フレトリー氏自身から聞いたのですが）、今日は猫も杓子も、取り柄もないのに勲章をもらっていると云ったそうです。フレトリー氏はこう付け加えました。「だから、リューゼルさん、私は彼がレジオン・ドヌール五等勲章略綬をつけてからというもの、事務所で彼の横に座るのが恥ずかしいんですよ」。

そして、この同じ人が、私の叙勲後初めての協会の集会で、聴衆の前で私を抱擁して賛辞を呈し、自分のボタンホールから勲章を外して私のボタンホールに付けてくれたのです²⁰。

リューゼルのラヴィルマルケに対する疑念は、おそらく生涯を通じて消えることはなかっただろう。それどころか、ラヴィルマルケの告白ののち、『バルザズ・ブレイス』に対する疑念は、彼のうちでほとんど確信に変わっていたはずである。つまり晩年のリューゼルにとってこの歌集の問題はもはや決着がついたも同然であり、そこにもし解決すべきものが残っているとすれば、それは消そうにも消せないラヴィルマルケに対する自らの感情的な葛藤のみだったと言えるかもしれない。

リューゼルとラヴィルマルケの死

ところで、晩年のリューゼルをおそらくラヴィルマルケ以上に悩ませたのは、ブルターニユの後進のフォークロリストたちの存在であった。たとえば、ナルシス・ケリアン *Narcisse Quélenn* である。一八四八年にラロツツシュ・デアリアンに生まれ、一八七五年にパリに移住し、そこで生涯を終えたケリアンは、ブルターニユに材を取った多くの詩や文学作品を残した。リューゼルは一八八三年八月、彼とともにコルヌアイユ地方を旅する。ルナンと同じトレゴール地方出身であったケリアンは、彼の仲介で調査のための助成金を得ており、それを手助けするためであった。同年十月、リューゼルはゲドスにこう書いている。「私は彼（ケリアン）の調査が十分に科学的で、期待された結果を与え得るものだとは思いませんでした。そもそも土地の優れた歌手を探して、何日もそのグループと一緒に過ごし、彼らに問いかけたり知っていることを採集したりするのではなく、あちこちで、たまたま出会った旋律だの節だのを拾い上げるだけで満足してしまうので

すから。あるいは、シャトーヌフ・ドユ・パウのような美景を眺めている方がお好みらしく、それだけで自分は何十ページも書けると言っていました³⁰⁾。

ケリアンは地味な民俗学的調査よりも、フォークロアのなかに文学のテーマを探すことに熱心なタイプの人間だった。そして、ブルターニュの風俗習慣の物珍しさを売り物にするその作品は、真面目な民俗学者たちの仕事の卑俗化ないしは戯画化につながりかねないものであった。後進が地道な研究の道を継がず、安易な「ブルターニュ趣味」に流れてゆくのは見るのは、晩年のリユーゼルにとつてたしかに氣力を削がれることであったに相違ない。ケリアンはまたルナンをはじめとするパリのブルターニュ出身の有名人を招待する「ケルトの晩餐」なる式典の中心人物としても活躍していたが、しばしばジャーナリズムを利用して派手に宣伝活動を行うその姿勢もリユーゼルの眉をひそめさせた。

一方、リユーゼルはまた彼の助手であったアナトール・ルブラスに対しては不満を隠さなかった。理由はここでもまた「文学」の過剰であった。一八九三年、彼はゲドスに宛ててこう書いている。「ルブラスのうちでは、詩人が批評家に勝りすぎていて、彼が学問的なテーマに向おうとすると、その想像力やレトリックがせつかくの資質を台無しにしてしまうのです」。もともと、リユーゼルは一八九三年に出版されたルブラスの『死の伝説』については「わが国で田舎の人々の信仰や風俗に関してこれまで出版されたなかで最良のもの³¹⁾と高く評価していた。しかし翌九四年に出た『バルドンの国』*Le pays des parions*には失望を隠せず、ゲドスに宛ててこう語っていた。「これは『死の伝説』よりずっと劣りますし、彼にも言いましたが、彼が目指している学問的な名声を傷つけるような性格のものです。これが『死の伝説』の後に出たことが腹立たしいです。あれはいい本だったのですが。ここでは、やたらに文ばかり多く、それも氣取った文で、あるのは絵空事と延々と続く切りのない描写ばかりです³²⁾」。

晩年のリユーゼルのラヴィルマルケへの接近は、こうした若い世代に対する失望とおそらく無関係ではなかっただろう。

加えて友人たちも次々と世を去っていた。なかでも九二年には一月にソヴェ、十月にルナンが相次いで世を去った。ラヴィルマルケとリュージェルにとつても、残された時間は多くはなかったのである。

その九二年、フィニステール県考古学協会の会長に再選されたラヴィルマルケは、会員の前で「これからも働き続ける」と誓ったが、九四年四月には体調不良のため初めて考古学協会の会合を欠席する。心配して手紙を寄こしたのはリュージェルだった。「あなたが健康状態のせいで今月二六日の会合の議長を務めることができず、残念でなりません。われわれの協会のためにも、またあなたの健康を祈っている私のためにも早く元氣になれますようお願いしております。どうぞご自愛され、またいつものような熱意と陽気さで、花と再生の月である五月の会合に戻ってきてくださいませよう」。手紙の最後にはブルトン語でこう書かれていた。「神様が健康と仕事に復帰する力を下さいますように。心から³³⁾」。リュージェルは六月一日にもこう書き送った。「最近、健康が回復されたという吉報を得ており、昨日は私たち皆であなたを盛大にお迎えするつもりでいたところ、相変わらず病氣であるというあなたのメッセージが届き、一同は深い失望に包まれ、会合はすっかり悲しいものになってしまいました³⁴⁾」。半年後の十二月一日付の手紙では、末尾に「さようなら、親愛なる会長さま。また十二月の集会で」と書いてから、ブルトン語でこう付け加えた。「立ち向かいますように、立ち向かいますように、老いに。われわれ二人の肩に重くのしかかる老いに。ご健康をお祈りします³⁵⁾」。

しかし、逆にそれから急速に健康を悪化させたのは、リュージェルの方だった。翌九五年初頭、病に倒れた彼は、二五日から二六日にかけての夜、カンペールの自宅でこの世を去る。七四歳だった。枕元にリュージェルから届いた手紙を置いていたラヴィルマルケは、報せを聞くと深い悲しみに暮れたと息子のピエールは伝えている³⁶⁾。

一方、ラヴィルマルケが八一年の生涯を静かに閉じたのは、その九五年の十二月八日のことだった。葬儀は、彼が生まれて間もなく洗礼を受けたサント・クロワ教会で行われ、近隣のさまざまな階層の人々が参列する盛大なものであったと

伝えられる。

おわりに

ラヴィルマルケの死後、その死を伝える多くの記事がブルターニュの新聞や学術雑誌に掲載された。以下、そのなかからふたつ引こう。まずはラヴィルマルケ自身も多く寄稿したカトリック系の『ルヴュ・ド・ブルターニュ・エ・ヴァンデ』の記事の一部である。

ブルターニュにとって、この一八九五年十二月八日という日は、永久に忌むべき葬送の日、国家的な喪の日となるだろう。ケランスケールで亡くなった優れた人物は、単に祖国ブルターニュの最も献身的な息子であったばかりではない。彼はまたブルターニュを称え、言葉の最上の意味でブルターニュを大衆化し、そこで生まれた者はもちろん外国人にもブルターニュを貴くかつ敬うべきものにするために多大の貢献をしたのである。

今世紀の文学の最も見事な開花期にあつて、ブリズー、ラヴィルマルケ、そしてスーヴェストルはフランスや世界にブルターニュのイメージを、その特質とその詩・言語・風俗・歴史を、きわめて真実にかつ生き生きと特徴的に紹介し、またその仕方も非常に独創的かつ感動的であつたため、それらは一人ならぬ寛大な精神と高度な知性の熱き心にことごとく熱狂的な共感を呼び醒ましたのであつた。

世界中の人々の意識のなかで、いまなお続くブルターニュへの格別な好意が芽生えたのは、まさにこのときなのであり、またそのおかげであの見事なケルト学またケルト・ブルトン学が進展し、われわれの古代社会に関する興味深いあ

の数多くのページが復元され、われわれの人種、すなわちガリア、ブルトン、ケルトの初期の著作家たちの真の相貌が、その魅力的な偉大さにおいて徐々にわれわれにその姿を現すことになったのである。今日この聖なる畑を耕して成果を上げている優秀な学者たちは、このことをけつして忘れてはならない。

だからこそ、ブルターニユはこの十二月八日という喪の日に涙を注がなければならないのだ。(……)

この断固たるキリスト教徒、この忠実なブルトン人の記憶は、(……) 彼を知り愛した人々の心のうちからけつして消えることはないであろう³⁷。

いまひとつは、一八八六年にジョゼフ・ロートによって創刊された『アナル・ド・ブルターニユ』誌上に掲載された記事の一部である。

われわれの地方の文学の歴史において、きわめて重要かつ輝かしい役割を演じたひとりの人物の逝去がブルターニユ全土に引き起こした哀悼の情は、われわれも深く共にするものである。彼以上に熱烈に絶えることなくブルターニユに愛情を注いだ人は誰もいなかったし、彼以上に今世紀において学者や文学者の注意をブルターニユに引き付けた人もたぶん誰もいない。ツォイス Neuss のような学者の言語学的発見にも無関心で、ケルト文献学の叢林や茨を見て後退りしかねない人も、ド・ラヴィルマルケ氏が詩の威光で飾り立てた研究には否応もなく引きつけられるのを感じたのである。

実際、ド・ラヴィルマルケ氏は真の偉大な詩人であり、またよく忘れられることだが、「ブルターニユもの」においては信者であり熱狂家であった。彼は本気でブルターニユの農民のうちに受け継がれているバルドの伝統を発見し、民

謡によって何世紀にもわたってブルターニュの魂の歴史を再構築できると信じた。歌に手を加え、辻褃の合わないところや不器用なところ（彼はそれを民衆詩人の無知のせいにした）を取り除けば、原初の純粹さに近づき、賞賛に値する敬虔な作品ができると彼は信じたのである。日常生活においてはきわめて繊細であったこの人は、ブルターニュのことになると、熱狂と幻想でできあがった宝物を抱えてしまうのだった。彼は信者の眼で、数々の驚異を、彼の後で同じ足跡を辿った人たちがどうしても見つけられなかった驚異を見た。そして彼らは彼の善意に疑いを差し挟むことで、自分たちの失望のつけをたぶん彼に少々高く支払わせたのだ⁸⁸。

前者の記事の署名はアルチュール・ド・ラボルドリー。後者はジョゼフ・ロートである。つまり、この二つの追悼記事におけるラヴィルマルケへの評価は、そのまま「バルザズ・ブレイス論争」で対立する二つの陣営の性格を反映したものだだったのである。もともと、ここでロートが体現しているような批判的な方向は、二十世紀の半ばに至るまで明確な形を取ることはない。『バルザズ・ブレイス』はこの論争ののちも、長い間真の意味で学問的な議論の対象となることはなかったのである。それどころかこの書物は、その後の地域主義やナシヨナリズムの運動のなかで、一部の知識人によって批判を超えた「聖典」として祀り上げられていく。つまり、それは善良なカトリック信者であったラヴィルマルケが思いもしなかったような文脈で解釈されていくことになるのである。

一方、この『バルザズ・ブレイス』の運命とは対照的に、リュウゼルの集めた民話や民謡は、彼の死後ほとんど顧みられぬまま長く忘却のなかに埋もれる。もちろんそこには、「バルザズ・ブレイス論争」において両者の差異を際立たせたさまざまな要素が関与していた。その意味で、この論争は二人の死後もなお途切れることなく続いていったと言えるだろう。もともと、それはまた稿を改めて語るべき別のテーマである。ここでは、とりあえずその火付け役の二人が世を去っ

たつじろぶ、ひとまも筆を描く)にしたい。

(おわり)

註

- (1) *Correspondance Luzel-Renan*, Presses Universitaires de Rennes/Terre de Brume, 1995, pp.203-204.
- (2) Francis Gourvil, *Théodore-Clau de-Henri Hensart de la Villemarqué et le «Barzaz-Breiz»*, Oberthur, 1960, p.246.
- (3) H. d'Arbois de Jubainville, *Encore un mot sur le Barzaz-Breiz*, Paris, Dumoulin, 1873, p.8.
- (4) *Revue celtique*, t.II, août 1873, p. 131, cité par F. Gourvil, *op.cit.*, p.251.
- (5) F. Gourvil, *op.cit.*, p.252.
- (6) F.M. Luzel, *Chants et chansons populaires de la Basse-Bretagne, Gwerziou II*, Réimpression de l'édition 1868-1890 présentée par Donatien Laurent, Maisonneuve&Larose, 1971, VI.
- (7) Lettre à Henri Gaidoz, du 13 décembre 1874, cité par Françoise Morvan, *François-Marie Luzel, Enquête sur une expérience de collectage folklorique en Bretagne au XIX^e siècle*, Terre de Brume-Presses Universitaires de Rennes, 1999, p.223.
- (8) *Ar Wriñez* du 5 décembre 1877, cité par F. Morvan, *Ibid.*, p.224.
- (9) *Correspondance Luzel-Renan*, pp.210-211.
- (10) Françoise Morvan, *François-Marie Luzel, Enquête sur une expérience de collectage folklorique en Bretagne au XIX^e siècle*, Terre de Brume-Presses Universitaires de Rennes, 1999, p.225.
- (11) Gourvil, *op. cit.*, p.254.

- (12) *Ibid.*, p.260
- (13) この点に関して、少なくとも F. Gourvil は否定的である。その理由のひとつは、ジュバンヴィル自身が一八九六年の『ルヴェ・セルティック』に書いたラヴィルマルケの追悼記事のなかで、『バルサズ・ブレイス』の著者との最初の出会いを一八八三年か八四年にパリで、と追想していることにある。詳細は Gourvil, *op. cit.*, p.261 を参照のこと。
- (14) *Fureteur breton, juin-juillet* 1913, pp.175-176, cité par F. Gourvil, *Ibid.*, p.266.
- (15) Gourvil, *op. cit.*, p.268.
- (16) 残された書簡から判断する限り、少なくとも一八七三年には、ラヴィルマルケとルメンはすでに互いに何のわだかまりもない関係になっていたと思われる。また、ラヴィルマルケは一八八〇年にルメンが死去した際、フィニステール県考古学協会の集会において、故人の功績を称える演説をした。 Cf. Pierre de la Villemarqué, *La Villemarqué, sa Vie et ses Œuvres*, Champion, 1926, p.153.
- (17) Lettre à Gaidoz, du 10 février 1881, cité par F. Gourvil, *Ibid.*, p.267.
- (18) Lettre à Gaidoz, du 3 janvier 1883, cité par F. Morvan, *op. cit.*, p.243.
- (19) F. Morvan, *op. cit.*, p.242.
- (20) Lettre à Gaidoz, du 5 juin 1885, cité par F. Morvan, *op. cit.*, p.247.
- (21) *Revue celtique*, t. III, 1877, cité par F. Gourvil, *op. cit.*, p.259.
- (22) Lettre à Gaidoz, du 31 juillet 1886, cité par F. Gourvil, *Ibid.*, p.271
- (23) *Correspondance Luzel-Renan*, p.288.
- (24) F. Gourvil, *op. cit.*, p.274.
- (25) *Chants et chansons populaires de la Basse-Bretagne*, Soniou I, IV
- (26) *Ibid.*, pp.V-VI
- (27) この封筒をリユーゼルの遺した資料のなかから発見したのは、アナトール・ルブラスで、一九〇三年のことだった。彼はそれをその年

⑥ *Annales de Bretagne* (t.XVIII, 1902-1903, pp.321-325) に写真付きで発表した。なお、F. Gourvil はリユーゼルがこの事実をけっして口外せず、自分の胸にしまっておいたと考えているが、これは本文で次に紹介するゲドス宛の手紙を見れば誤りだということが分かる。Cf. F. Gourvil, *op. cit.*, p. 280; F. Morvan, *op. cit.*, p. 268.

②⑧ *Ibid.*, 280

②⑨ F. Morvan, *op. cit.*, p. 266.

③⑩ *Correspondance Luzel-Renan*, p.258.

③⑪ Lettre à Gaidoz, du 17 juin 1893, cité par F. Morvan, *op. cit.*, p. 273.

③⑫ Lettre à Gaidoz, du 6 juillet 1894, cité par F. Morvan, *op. cit.*, p. 274.

③⑬ P. de la Villemarqué, *op. cit.*, p. 188.

③⑭ *Ibid.*

③⑮ *Ibid.*

③⑯ P. de la Villemarqué, *op. cit.*, p. 159.

③⑰ *Revue de Bretagne et Vendée*, t.XIV, décembre 1895, pp.405-407.

③⑱ *Annales de Bretagne*, t. XI, No 3, avril 1896, pp.345-346.

